

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 未来を支える働き方

- 5 **働き方改革の実践**
少子化ジャーナリスト・作家
白河桃子
- 9 **ボトムアップのチャレンジ**
株式会社リクルート
働き方変革推進室 エバンジェリスト
二葉美智子

- 12 ぶら〜り首都高めぐりの旅
1号羽田線の巻
- 13 CHALLENGE
技術コンサルティングの挑戦
- 14 Taste of the Season
森下典子

16 首都高HEADLINE

- 18 BUSINESS ESSAY
ゆっくり、あせらず
東京大学大学院 経済学研究科 教授
柳川範之

- 20 つくる人まもる人
首都高パトロール株式会社
稲山裕幸

- 22 高速百景 中野正貴

contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited



illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 37

首都高名所案内

洲崎パラダイスと 騎馬の公園

コラムニスト
泉 麻人

5月の長い連休の最終日、木場のあたりを散策した。僕は東京の区立小学校の出身なのだが、小学4年生の社会の授業で使った「わたしたちの東京」という副教科書をいまでも保存している。これに載っている当時（昭和40年頃）の木場の解説は印象的だった。「このあたりは、木場とよばれてきました。堀わりや、堀わりにそった池に

は、遠くはこぼれた材木が、たくわえられています。木場の人たちは、その上をじょうずにわたり歩いて、しごとをしています」
木場って町に行くと、水上の材木の上をひよこひよこ歩いてる人がそこらじゅうにいるのだ……なんて光景を思い浮かべたことを記憶している。とはいえ、木場周辺にこういう古式ゆか

しい材木問屋や貯木場が集まっていたのは、僕が小学生だった昭和40年代前半くらいまでで、その後はさらに東京湾側の埋立地・新木場一带に拠点は移動した。

町角に材木そのものは見掛けなくなつたものの、材木商らしき名義の表札を出したビルが所々に見受けられる。材木運搬に使われた水路は暗渠化されて遊歩道や公園に変わった所もあるけれど、大横川や平久川……まだ水流が眺められる場所は多い。

三ツ目通りの平木橋の上に立つと、東陽町の側に赤い小橋がぼつんと見える。新田橋というこの橋、赤い塗装からして、すぐ脇の洲崎神社の神橋が……と思つたら、神社とは直接の関係はないようだ。新田もシンデンではなくニッタと読み、これは近所に住んでいた新田さんというお医者さんが亡くなった夫人の供養の意を込めて、昭和7年に私費で設備した橋らしい（現在の橋は平成年間に復刻された2代目）。洲崎神社の向こう、東陽1丁目の界限は昭和30年代初めまで、洲崎遊郭街として知られていた。永代通りの東陽3丁目から湾側へ行く大門通りというのがそのメインストリートだったが、もはや往時の面影のある建物はない。

DVDにもなっている川島雄三監督の映画「洲崎パラダイス 赤信号」（昭和31年）に遊郭時代晩年の貴重な景色が記録されている。

この映画で主人公の新珠三千代と三橋達也が乗る、懐しきボンネット型の都バスの車窓にも貯木場らしき池が写りこんでいるが、首都高木場出入口の真ん前に広がる木場公園も、もとは大きな貯木場だった一帯なのだ。

木立ちの先に広大な草っ原、仙台堀川に架かる吊り橋の向こうにスカイツリーが望める。近頃はこういう都会の緑地公園でも、ワンタッチ式のテントをセットしてデイキャンプを楽しんでいる若い家族が目につく。

そういえば、15年ほど前、この公園の一角に設置された仮設シアターでフランスの騎馬オペラ「ジンガロ」を観賞した。走る馬も芝居する役者も圧巻だったが、木場という会場の地も意外だった。やはり、騎馬にちなんでここに決めたのだろうか……。

いずみ あさと／1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。「週刊TVガイド」などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『冗談音楽の怪人・三木鶏郎』（新潮社）がある。